

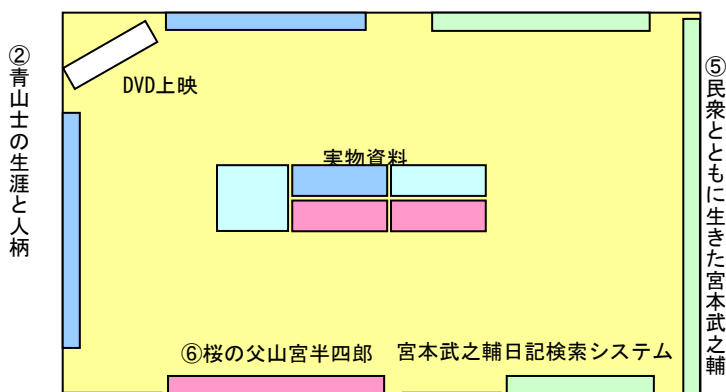
補修工事 青山士・宮本武之輔と山宮半四郎

開催期間

平成18年4月14日(金)～6月4日(日)

展示構成

③青山士の思想と言葉 ④宮本武之輔の信念と人生



⑦大河津可動堰改築事業パネル

①補修工事概要

- ①補修工事概要
大河津分水工事における「信濃川補修工事」について概要を紹介。
- ②青山士の生涯と人柄
青山士の生涯を年譜とエピソードで紹介。
- ③青山士の思想と言葉
今に遺る青山の思想と言葉を紹介。
- ④宮本武之輔の信念と人生
宮本武之輔の人生を年譜と資料で紹介。
- ⑤民衆とともに生きた宮本武之輔
「民衆の懷に飛び込む」宮本と地域住民との交流を紹介。
- ⑥桜の父 山宮半四郎
大河津分水の桜を守り育てた山宮半四郎を紹介。
- ⑦大河津可動堰改築事業パネル
信濃川補修工事にて建設された可動堰の改築事業について、その必要性や現在の状況を紹介。

- 青山士関連コーナー
- 宮本武之輔関連コーナー
- 山宮半四郎関連コーナー

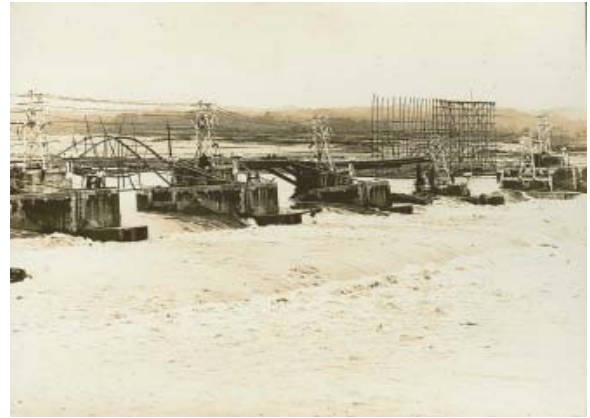
●補修工事までのあゆみ

明治40年（1907）政府は大河津分水工事の実現を決定し、分水路の掘削と水量を調節する堰の建設に着手、地すべりなどの困難を乗り越えて大正11年（1922）大河津分水路に初めて水が流れました。しかし、通水から5年後の昭和2年（1927）分水路へ流す水量を調節する自在堰が突如として陥没、ただちに応急工事が行われ、引き続き、可動堰や床留・床固を建設する補修工事が行われました。

本企画展では、この「補修工事」について、技術者であった青山士と宮本武之輔の人物像を中心に、大河津分水の桜の父である山宮半四郎についても紹介します。



完成直前の自在堰



自在堰陥没の状況
燕市古澤清治氏寄贈



自在堰陥没における仮締切工事と推測される写真
燕市皆川氏寄贈



右岸に積み上げられた足場用と推測される資材
燕市古澤清治氏寄贈



大倉組による矢板打ち込み準備
燕市古澤清治氏寄贈



仮締切り堤防建設のための川倉沈床の設置
燕市古澤清治氏寄贈

●青山士の生涯と人生

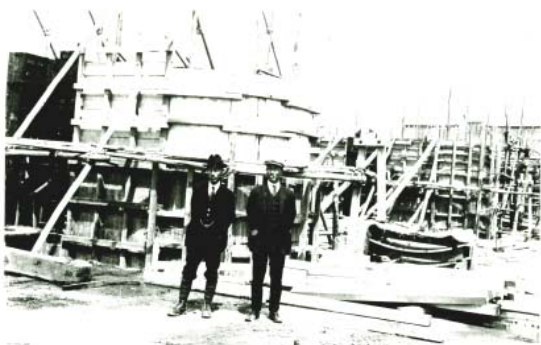


あおやま あきら
青山 士

明治 11 年 (1878)、静岡県豊田郡中泉村 (現在の静岡県磐田市郊外) 生まれ。明治 32 年 (1899)、東京帝国大学工科大学土木工学科に入学。このころクリスチャンである内村鑑三から強い影響を受け、土木技術を人々のために役立てようと勉学に励みました。

当時は、大西洋と太平洋を結ぶパナマ運河の建設が始まろうとしていました。この世界的な大事業に情熱を燃やした青山士は、大学を卒業すると、恩師である土木工学者・広井勇から紹介状をもらって単身アメリカに渡り、7 年間、測量・設計技師としてパナマ運河の建設作業にたずさわりました。

明治 45 年 (1912) に帰国後、内務省の技師となって東京の荒川放水路工事に従事。昭和 2 年 (1927)、大河津分水の自在堰陥没が起きると、新潟土木出張所長として赴任し、現場責任者である宮本武之輔と協力しながら、補修工事の完成に貢献しました。昭和 9 年 (1934) に内務省第 5 代内務技監、昭和 10 年 (1935) に第 23 代土木学会長に就任。昭和 38 年 (1963)、84 歳でその高潔な生涯を閉じました。



可動堰工事現場に立つ青山士 (左) と宮本武之輔 (右)



信濃川補修工事竣工式に出席
左から 2 人目が青山士。中央は宮本武之輔
撮影：昭和 6 年 6 月 20 日



竣工式で祝辞を述べる青山士



大河津分水殉職者慰霊祭の折の青山士
山宮半四郎 (山宮半四郎コーナー参照) の姿も見えます。
撮影：昭和 25 年 4 月 22 日



子供の誕生祝いに青山自らデザインし、
家族に配ったイニシャル入りボンボン入れ
荒川知水資料館所蔵



内務技監在官記念として有志より贈られた燭台
荒川知水資料館所蔵



パナマ時代より愛用した双眼鏡
荒川知水資料館所蔵



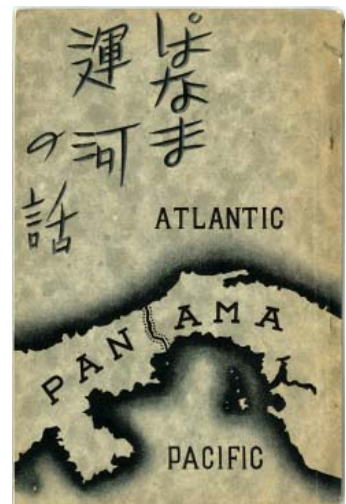
地質調査用ハンマー
柄の部分に青山氏独自の印が刻印されている。
名前の土にカタカナのハの字を組み合わせたもの。
荒川知水資料館所蔵



信濃川補修工事竣工の際に贈られた記念品
嘉村正規氏寄贈



信濃川補修工事竣工記念の銀ナイフ
柄の部分に分水路、可動堰の彫り込みが見えます。



青山士著書『ばなま運河の話』

●青山士の思想と言葉



信濃川補修工事竣工記念碑に刻まれた青山士の言葉（拓本）



長野県和田嶺トンネルにある青山発案の碑文
 信濃川補修工事竣工記念碑にも使われている万国共通のエスペラント語で次のように書かれています。
 Por la Vojo de la Homaro. 人類の願望の為め
 Kun Penoj de la Homaramo. 人類愛の努力をもって



信濃川補修工事従業員一同碑の銘文

この碑は、信濃川補修工事に従事した人達の苦勞を永遠に記念するために、青山士の発案で従業員がお金を出し合い建立したものです。



荒川放水路工事の竣工を記念する銘文

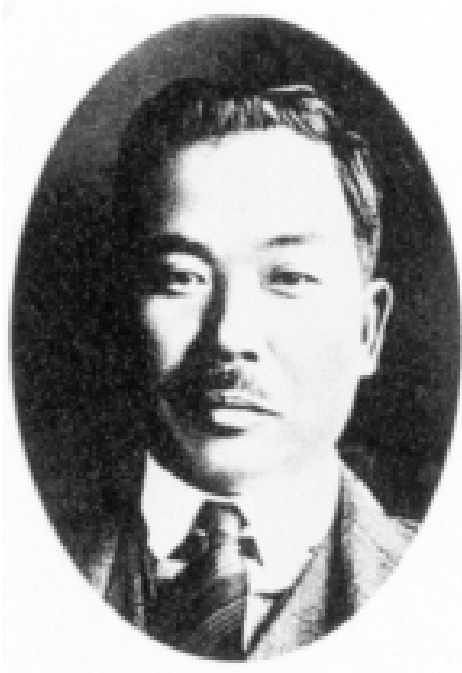
荒川と隅田川の分岐点にある岩淵水門入口（荒川知水資料館前）に建立されています。大河津分水と同じく青山士の言葉です。



これは青山士氏が水門の視察に訪れた際千葉利智氏と八田嘉明氏に請われて書いた詩文です（右訳参照）。
 荒川知水資料館所蔵

治水養民	志之	治水養民（水を治め民を養う）
※1	※2	之を志す
技 涛天	勝断	技 涛天の勝（眺め）を断ち
形式一変	尚治	尚ひさしく治むる
桑田変	趣	形勢一変の趣
為河底		桑田変で
訪水門	利智	河底を爲る
技制自然	嘉明	水門を訪れ
懷舊	應希	水門を制す
千九百二十四年六月二十九日	懷舊の状	希ねがいは應ず
荒川下流改修工事視察二際シ		懷舊の状
涛天とは、眺めた風景を指す。長い間に風景が変わることつまり時代が変わることを漢詩では『桑海の変』という。		

●宮本武之輔の信念と人生



みやもと たけのすけ
宮本 武之輔

明治 25 年（1892）、愛媛県松山市沖合の興居島に誕生。少年時代に家計が苦しくなり、一時、勉学の道が絶たれましたが、郷里の篤志家の援助を受けて上京。大正 6 年（1917）、東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業後、内務省土木局に就職し、利根川や荒川の治水工事にたずさわりました。

昭和 2 年（1927）、大河津分水工事の自在堰が陥没すると、内務省はその補修工事の現場責任者として、コンクリート工学の第一人者として成長した若き宮本武之輔を派遣しました。新潟土木出張所兼務となった宮本武之輔は、自在堰にかわる可動堰を設計、現場に寝泊りしながら、4 年間にわたり工事を陣頭指揮しました。

可動堰完成後は、内務省の技術官僚として精力的に活動し、技術者の地位向上運動においても中心的な役割を担いました。昭和 16 年（1941）、興亜院技術部長から企画院次長に就任し、今日の科学技術庁の前進である内閣技術院の設立にも尽力しました。その年の 12 月 24 日、惜しくも 49 歳の若さで急逝しましたが「民を信じ、民を愛す」という宮本武之輔の信条は、多くの土木技術者に受け継がれました。



幼少時代



四国巡礼



結婚式

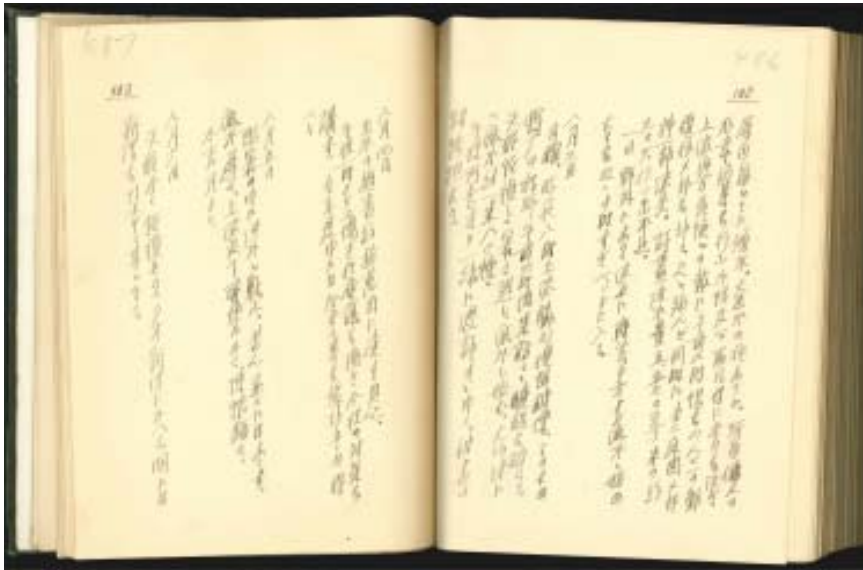


宮本武之輔の言葉
燕市山田トモエ氏寄贈



発刊直前まで原稿
整理が進んだ自伝

●民衆とともに生きた宮本武之輔



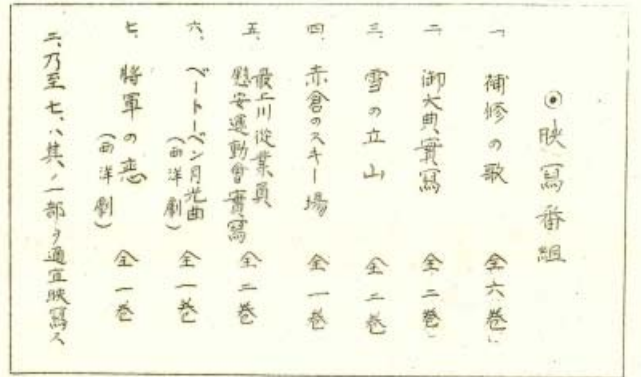
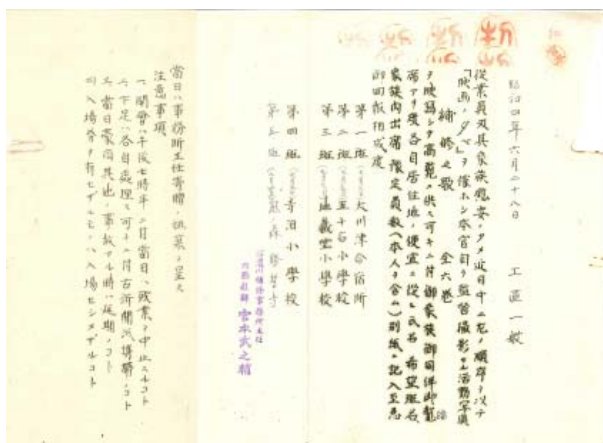
宮本武之輔直筆の日記（全18巻）。
文才にも秀でた宮本武之輔は数冊
の小説も残しています。
宮本信氏所蔵

昭和5年8月2日、仮締切りを切断した日の日記

可動堰の工事が始まって3年目の夏、集中豪雨によって、信濃があぶれ各地の堤防が、切れはじめました。洪水が起きれば、また多くの農民が苦しみを味わいます。現場責任者である宮本武之輔は、建設中の可動堰を守っている仮締切りを壊すことを独断で指示しました。こうして洪水はくい止められましたが、困難な工事がさらに手間取ることになりました。しかし、上司である青山士は「わたしが君の立場でも同じことをしただろう」と宮本武之輔の勇気ある決断をたたえました。



洪水のため可動堰仮締切りを切り
分水路に水を流しました。
撮影：昭和5年8月2日



映写会の案内状
新潟市嘉村正規氏寄贈

補修工事は昼夜、季節を問わない突貫工事で、工事は困難を極めました。現場の責任者であった宮本武之輔は、現場の活性化のために「補修工事の歌」を作詞し作業員とともに歌いました。また、宮本武之輔は、四季折々の作業風景を16ミリカメラで撮影・編集し、従業員やその家族を招いて上映しました。

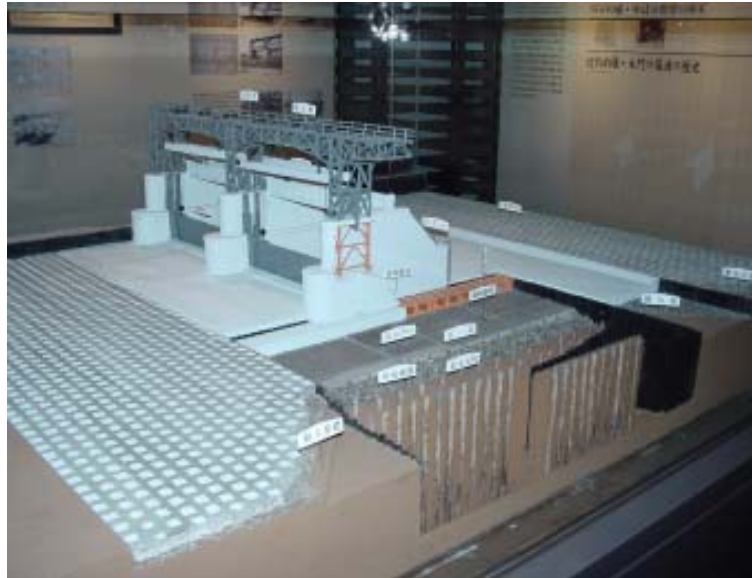
信濃川補修工事の歌

- 一、此処は北越信濃川
流れも早き分水の
末はいづくぞ寺泊
- 二、極寒三月は風荒れて
日夜分たぬ雪の空
夏は硯の水も沸く
- 三、努むるますらを百餘人
安き夢だに結び得ぬ
補修の辛苦誰か知る
- 四、川に漲る濁流に
堰の固めの安かれと
尽す誠の血の誓
- 五、み国の為と思ひをば
骨を削りて皮を殺ぐ
苦心もいかで厭ふ可き
- 六、虎は死しても皮止め
人は死しても名を残す
信濃治水のその為



忠霊塔

地蔵堂町（現在の燕市地蔵堂）の方々が宮本武之輔に忠霊塔の設計をお願いし、建設されました。このことは日記にも記されています。



宮本が制作した可動堰模型

昭和6年6月20日に行われた信濃川補修工事竣工式で地蔵堂実業協会会長の山田國三が述べた祝辞の中に、現在、信濃川大河津資料館2階に展示している宮本武之輔が製作した模型のことが記されており、模型は基礎の部分が確認できる内面模型であること、上越線全通記念博覧会へ出品することなどがわかります。

●補修工事の竣工



可動堰9・10径間附近の鋼扉、対重、管理橋上部、捲揚機の試運転の状況 撮影：昭和6年3月30日
新潟市渡部猛氏寄贈



職員一同の写真
中央に青山士と宮本武之輔が座っています。
新潟市嘉村正規氏寄贈

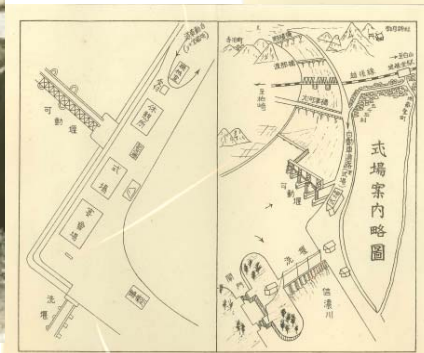


竣工報告祭式場

新潟市嘉村正規氏寄贈



竣工式次第
新潟市嘉村正規氏寄贈



●桜の父山宮半四郎



やまみや はんしろう
山宮 半四郎

大河津分水の堤防に私財を投じておよそ 6000 本の桜を植えるとともに記念公園をつくりました。そこには大河津分水工事という偉業を後世に永く伝えたいという情熱があり、植樹した桜の育成に半生を注ぎ、日本一の桜並木を育みました。また、地藏堂町長を務めたこともあり「分水町」の名付け親にもなりました。

参考文献：分水町閉町記念誌



山宮半四郎 16 才 (写真
上)



分水公園の桜 (昭和 12 年撮影)
写真提供：燕市山宮氏



現在の分水公園の桜 (平成 17 年撮影)



山宮半四郎の国華論
昭和 11 年 5 月 3 日新潟新聞
「国華を愛せ」と題して寄稿しています。

●山宮家に伝わるアルバム



山宮家のアルバム

山宮半四郎自身の写真をはじめ、分水の桜や山宮半四郎の交友関係などを知る貴重な資料です。岡田紅陽撮影の写真もあります。

燕市山宮氏所蔵



島技師分水視察（昭和九年五月撮影）
写真の人物は右から次のとおりです（山宮氏アルバムより抜粋）。

鈴木 大河津事務所主任
神谷 縣土木技師
島 大阪市土木部長 技師
半四郎
児玉 内務省事務官



山宮家のアルバムに収められている田沢実入の写真



武石貞松先生慰安揮毫会（昭和6年6月撮影）

後列右から4人目が山宮半四郎。武石貞松は旧中之島町出身の人物で、高橋竹之介の誠意塾に学び、地域の発展に尽力しました。



岡田紅陽撮影記念（昭和24年4月撮影）

大河津分水公園に建つ「桜之碑」の前。後列左から4人目が山宮半四郎。前列左端が岡田紅陽。岡田紅陽は新潟県出身の写真家です。